

フ迄モナシ」ではじまり、この 1. 緒論に、口腔細菌を詳述してある。2. 齲蝕、齲蝕齒、齒牙齲蝕症、3. 齒牙沈着物、齒垢、4. 齒髓疾病、5. 齒膜炎、齒根膜炎、6. 智齒發生困難、7. 齒石、8. 永久齒吸取症、9. 磨耗症、10. 齒牙侵蝕症、11. 牙關緊急、顎強直、12. 顎骨々折、13. 破裂口蓋補綴術、14. 口腔ノ囊腫、15. 齒牙保存法、16. 抜齒術、17. 口腔ノ衛生、の17項目からなっている。なお、末尾に「筆記者曰ク講話ヲ補フニ実物及精巧ナル模型等ヲ以テセラレタルモ筆記中ニハ其図ヲ挿入セザルガ故ニ恐クハ隔靴搔痒ノ点多カラシ之レ遺憾ニ耐ヘザル所ナリ」で結ばれている。

20) 日本海軍歯科医科士官の歴史(III) 第一次世界大戦と歯科医師

東京都世田谷区 山 崎 智

明治3年(1870年)、芝高輪に海軍病院が設置されたが、この時の医官は武官と文官の二本立てであった。

明治6年(1873年)、徴兵制の施行により軍医科が設けられ、同6年(1876年)の「海軍武官官等表」の改正により軍医総監以下官階が定められ、文官の医官は廃止された。

又、明治19年(1886年)には薬剤官の官等が定められて任用された。

又、看護科には、明治30年(1897年)の改正により士官(高等官八等)の官階が新設された。

歯科に関しては明治27~28年(1894~1895年)の日清戦争の頃より、将兵に歯科疾患が多いのにも拘らず軍隊内においては歯科医としてのポストがなく、医師と歯科医師の処遇の格差が大きいので、軍医と同様、歯科軍医をつくるよう歯科界内部からの要望が高まった。

これに対し海軍は、軍医の中で歯科を専攻した経歴を持つ原田朴哉軍医少監が専ら歯科治療を行い、陸軍も明治37年、戸山陸軍予備病院に口腔科を設置し、石原久氏、佐藤運雄氏、軍医の岡谷米次郎氏等が治療を行った。

明治38年(1905年)大日本歯科医会等の運動に

より、1月海軍に4名、又同年6月陸軍に5名歯科医嘱託が誕生し、日露戦争に従軍した。

日露戦争に従軍した海軍軍医官は候補生を含め311名、薬剤官18名、看護師31名、看護下士370名、うち戦死者8名、看護部員は687名、うち14名が戦死した。

戦争終結後、海軍は嘱託の制度は存続したが、陸軍は廃止された。

日露戦争において、我が国の将兵の死傷者は118,000人、戦費15億円余という大きな犠牲を払って勝利を収めたが、日露戦争後の国際情勢は新しい国際均衡の時代を迎えた。即ち英米が我が国を積極的に支援してきたのはロシア極東進出を抑える国際バランスによるものであったので、日露戦争によって我が国が、中国大陆に利権を獲得すると俄かに米英両国の態度が変化し、我が国に圧力をかける政策となり、日米関係は対立へと移行する情勢となった。

そして日露戦争後の明治40年(1907年)から世界大戦後の平和が到来した大正9年(1920年)迄の14年間は、世界の海軍国は、日露戦争の海戦の戦訓により、大艦巨砲主義が主流となり建艦競争時代となって、第一次世界大戦の要因となった。日露戦争に勝った日本は、列強の国々と伍すためこの建艦競争に、乏しい国家財政の中で取り組んだ。

その頃歯科界は、明治36年(1906年)医師法とは別に歯科医師法が5月成立、翌40年4月、会長が高山紀斎氏から榎本積一氏に変わった。また、同年9月12日我が国で初めて東京歯科医学専門学校が、42年8月12日には日本歯科医学専門学校がそれぞれ専門学校令によって設置を認可された。

このような情勢の中で歯科軍医の問題がどのような経過を辿っていったかを、第13回本学会に引続いて焦点を第一次世界大戦に絞って今回は報告する。